

つくばエクスプレス沿線整備と新川耕地・周辺特別委員会
視察報告書

2016年2月8日

日本共産党 小田桐たかし

◆視察項目

- ・香川県高松市：多核連携型コンパクト・エコシティ推進計画について
- ・香川県善通寺市：地域産品（讃岐もち麦ダイシモチ）開発と地域ブランド化事業について

◆所感

・香川県高松市：多核連携型コンパクト・エコシティ推進計画について

『まちづくりは100年の計』という言葉が新人議員当時、よく耳にしたが、それを体現しているかのような事例といえる。

高松市は、香川県の県庁所在地であり、国の各出先機関も集中している四国内での一大拠点といえ、人口では本市の2.4倍、面積では約10倍強もある都市である。

県下一斉に行われた線引き制度（整備・開発・保全を区分けする市街化区域・市街化調整区域）がH16年に廃止され、また周辺6町との合併により、地価が比較的安い地域への人口・住宅の拡散と、都市基盤整備地域の拡大・拡散が余儀なくされ、しいては、中心市街地の賑わいの喪失が課題となってきた。このことを受け、H19年度総合計画で国が提唱する『コンパクトシティ』を行政上持ち込み、H20年度の都市マスタープラン改定など8年が経過している。

コンパクトシティ計画への是非や見解は、ここで述べることを避けるが、行政上、本気でこの計画を完了させるのであれば、計画に対し議会承認を取り付け、行政職員と計画に賛成した議員が、郊外にある自分たちの私有財産を売り払ってでも中心市街地に移り住むぐらいの覚悟がなければ、絵に描いた餅にならざるを得ない。高松駅周辺には巨費を投入したシンボルタワー建設など公費を集中させても、にぎわい創出には至っていないことから明らかであろう。

それは、中心市街地から住民を移動（追い出し）させたのは、地価や不況、個人所得の減少、将来不安など社会的及び個人的な経済環境と同時に、行政判断の見通しの甘さがあったからであり、住民にとってみれば、行政による判断ミスで大きな環境変化を強いられる『被害者』に過ぎず、今後の進捗は相当な、そして大きなハードルが待っていると考える。

一方、35^千㎡しかない本市の場合、高松市と比較して1^千㎡当たりの人口密集度は5倍もあり、十分に、完成された『コンパクトシティ』と数字上もいえる。このことから、拡大した街を、高齢化や人口減少などを理由に、再度、市街地へ集中させれば課題が解決できるという『コンパクトシティ論』を無理やり持ち込むことはナンセンスであることは党派を超えて議員各位の共通認識になったのではないだろうか。また、各地域が均等で持続可能なまちづくりを行政上、力点を置くことが求められることの重要性を再認識できた。

現在、本市では、TX沿線への過大な投資と、小中併設校と市民総合体育館建て替え、駅前市有地活用（50年間の貸借）など場当たりの起爆剤の打ち上げにより、市内各地における均等な維持・進展に支障をきたしていることから、これまでも、そしてこれからも、大いに見直しを求めたい。

・香川県善通寺市：地域産品（讃岐もち麦ダイシモチ）開発と地域ブランド化事業について

土地や風土、そして街の歴史を融合させた取り組みとして、様々な問題提起をいただいた視察となった。

そもそも、農業の実態把握について、H8年に実態・意識調査を行った善通寺市と本市は大きく異なる。本市では、農業センサスなどの指標しか持ち合わせておらず、農家の実態把握が決定的に遅れている。そのため、スタートラインから大きな差あり、しかも進む方向性まで違ってくることを改めて痛感した。

それは、耕作放棄地の拡大と担い手の高齢化という課題解決として、善通寺市では、H9年に誕生させたダイシモチについて、善通寺とゆかりのある『弘法大師』と『ダイシ』をかけ、H15年から『ダイシモチ』として地域名産づくりのスタートとなっている。本市では、H15～26年度まで農業予算はほぼ横ばい状況で、農地管理も担い手確保も『農家任せ』となっており、この12年間、課題が積み残され、深刻化している。

善通寺市では、ダイシ麦の作付けは、H15～24年度まで10^万程度しかなかったが、第3セクター（榎まんてがん（方言で、全部丸ごとの意味）をたちあげ、人事に企業経営の経験者を市の嘱託職員として採用・派遣したことで、一定年数毎の職員転換に左右されず、また事業に特化した取り組みの推進体制を構築させている。また、H25年度300^万（H24年度比30倍）、26年度740^万（同比74倍）、27、28年度約2000^万（同比200倍）と拡大させ、現在では、市内学校給食（月2回米飯給食に混ぜて提供）はもちろん市外及び四国内の需要に100%対応できている事態である。

この背景には、需要と供給の体制構築、施策の継続性からくる設備投資の課題、農家及び市内事業者が行政への信頼構築、生産者部会などによる品質確保、

低迷期でも種の保存をしてきた関係者の地道な努力があるといえる。本市では、善通寺市よりも稲作の苗付けが1か月早く、収穫も半月遅れることから、『善通寺讃岐ダイシモチ』の作付けを水稻との2毛作で進めることはできないが、ダイシモチ自身は本市内でも作付け可能なことから、気候風土・歴史を生かした地域産品による地域ブランド化は本市でも可能といえる。

また、善通寺讃岐ダイシモチのブランドについては、単価統一・転売禁止のみしかなく、加工方法、販売・運搬方法、陳列方法は各取扱店舗に任せであり、気軽さを確保しつつも、買ったたき等への防御線を張っている。また、糖尿病罹患率が全国トップクラスにある香川県の食事環境（うどんの多食等）には優れた成分を持っている食材機能を最大限生かし、健康ブームやスポーツジム通いがより一般的になってきた社会情勢を素早くキャッチし、店頭販売先を、量販店に固定せず、糖尿病の医院やジムにも拡大でき、かつ保存期間が長いことも功を奏していると考える。さらに、『善通寺（I）、讃岐（I）、モチ麦（I）、ダイシ（I）モチ（I）』とすべての言葉の母音が『I』となっていることで、耳に残り、商品の響きがなじみやすさを持っていることは大変印象に残った。本市でも、地域ブランドの立ち上げは、農業委員会建議書でも明記されており、大いに参考にできると思われる。